

小児病棟以外での小児看護学実習に関する文献研究

秋 田 由 美*, 高 橋 泉*, 弓 気 田 美 香*, 山 口 明 子*

A literature review of pediatric nursing practice outside pediatric wards

Yumi AKITA*, Izumi TAKAHASHI*, Mika YUGETA*, Akiko YAMAGUCHI*

抄録

看護基礎教育における小児看護学実習の小児病棟以外の場での実習内容と学生の学び、課題を明らかにし、学生の学びにつながる小児看護学実習を計画する一助とする目的で、2014年から2019年8月までの約5年間の国内論文30件を分析した。その結果、実習の場として、保育施設、障害児施設、外来、子育て支援施設、教育機関、NICUなどが活用されていた。そして、実習施設が不足する中で、小児病棟にこだわらず、障害児施設で看護過程の展開をする実習でも小児病棟と同様の学びを得られることが明らかになった。また、保育施設や子育て支援施設、外来、教育機関など、子どもと家族が生活する様々な場での看護実践を学生が学ぶ実習も行われていることが明らかになった。小児領域においても地域包括ケアが広がっている現在、地域の中で、どのような看護が必要とされているかを考える能力や看護を提供できる能力を育てる実習計画が必要である。

キーワード：小児看護学実習，文献研究，看護基礎教育

Key words : pediatric nursing practice, literature review, basic nursing education

1. はじめに

近年の少子高齢化や入院日数の短縮化に伴い、小児医療体制は重点化・集約化（厚生労働省，2016）され、一般病院の小児科病棟を標榜する施設は2003年3284施設から2017年2592施設と大幅に減少している（厚生労働省，2017）。一方、看護師学校・養成所の入学定員の推移をみると、2003年54,202人から2017年67,042人と15年間で1.2倍に増加し（文部科学省，2018）、小児科病棟数の減少に対し、実習を行う学生数は増加しているという現状がある。そのような中、厚生労働省は2015年に「小児看護学実習の実習施設

としては、病院以外にも、診療所、保育所、小学校、中学校、保健センター、社会福祉施設等を含めることが出来る」という通達を出している（全日本病院協会医療行政情報，2015）。また、政策においても地域包括ケアシステムのコンセプトを子どもの医療にも広げることが検討される等、病院中心から地域中心の地域共同社会の実現に向けて方向転換されつつある（厚生労働省，2016）。これらのことから、小児看護学実習の実習展開については、多くの教育機関で様々な工夫がなされ（山内他，2017；山本他，2018；太田他，2014）、小児病棟以外での実習

*駒沢女子大学看護学部

も増加していることが予測された。しかし、小児病棟以外での実習における学生の学びを明らかにした研究は少なく、2012年の文献検討のみであった(清水, 2012)。そこで、本論文では小児看護学実習における小児病棟以外での実習内容と学生の学び、課題を最近の文献から明らかにしたいと考えた。

II. 研究目的

看護基礎教育における小児看護学実習の小児病棟以外での実習内容と学生の学び、課題を明らかにし、学生の学びにつながる小児看護学実習を計画する一助とする。

III. 研究方法

近年の国内動向を調査するため、文献検索は2014年から2019年8月までの約5年間の国内原著論文に限定した。2019年8月に医学中央雑誌Webを用い、「小児看護」「実習」をキーワードとして検索をした。その際、母性看護学実習と学内演習に関する文献が多く混在していたため、「母性」と「演習」を除外して検索した。その結果118件が該当したが、そのうち研究目的に合致する30件を分析対象とした。分析対象とする論文の選定は、論文タイトルと抄録、必要時には論本文を参考に、複数の小児看護学研究者で検討した。

IV. 結果

以下に実習の場ごとの実習内容と学生の学びや課題に関する報告内容について、記述する。分析対象文献を表1に示し、以下は表中の番号で記述する。

1. 保育施設

文献は10件であり、実習日数は2日間から5日間(1週間)であった。実習内容は、保育園や病児保育施設における、保育士と子どもとの

関わりの見学や、子どもと直接かかわることが主であった。さらに、保育園での子どもの体調管理の方法や園で起こりやすい事故や感染防止に関する健康教育の見学、または園児を対象とした健康・衛生教育の指導の実践などであった。それらの学びを、カンファレンスを通して、グループ間で共有することで、健康な子どもの発達や関わり方を学ぶ実習形態であった。

保育園実習での学生の学びは、保育士と子どもの関わりやカンファレンスでの情報共有から「健康な子どもの発達の理解」(文献1,5,9,10)や「年齢や発達に合わせたコミュニケーションの取り方」「言語発達の理解」(文献3,5,9)、「遊びによる子どもの発達の促進」(文献10)を学んでいた。また、食事などの生活動作の様子を見学することで、「保育園で行われる子どもの体調管理」「生活習慣獲得の支援」「保育園で行われている事故・感染防止」などの保育園における子どもの健康管理に関する学びがあった(文献5,9)。健康障害を持つ子どもとの関わりから、食物アレルギーや熱性けいれん、発達障害や医療的ケアを受ける子どもへの支援について学んでいた(文献8)。園児を対象とした健康・衛生教育指導の実践では、健康課題の抽出や日常生活を理解し、テーマの設定や子どもが理解しやすく、興味関心が持てるような表現方法などのプレゼンテーション技術についても学習することができていた(文献4,6,7)。また、病児保育施設における実習に関する論文(文献2)では、「病児の体調を考慮した遊びの提供の仕方」「感染管理」などを学生は学んでいた。

保育園実習の課題には、学生が「子どもを理解できないことの困難」「同時に複数の子どもとかかわることの困難」などを感じており、授業と保育園実習だけでは子どもの発達段階によるかかわり方の違いが判らず、困難を感じている学生がおり、不安を抱えたまま臨地実習に臨

表1 分析対象文献

保育施設

1. 片山 陽子, 上山 和子 (2014) : 保育所実習における中間カンファレンスの学習内容 看護系大学における実習記録からの分析, *インターナショナル Nursing Care Research*, 13 (2), 101-107
2. 徳永 千代子, 伊藤 裕子, 近藤 三稚江, 他 (2014) : 病児保育所に看護学生の実習を受け入れて 保育士・看護学生からのアンケート調査より, *病児保育研究*, 5, 56-59
3. 豊福 瑞穂, 藤井 光輝, 中田 佳代子 (2014) : 保育所実習で看護学生が学ぶコミュニケーションの学び, *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*, 9, 39-42
4. 原田 美枝子 (2015) : 看護学生による保育園での健康教育の学び, *神奈川歯科大学短期大学部紀要*, 2, 41-46
5. 柴崎 由佳, 二宮 恵美 (2015) : 小児看護学実習における保育園実習での学び, *看護教育研究学会誌*, 7 (2), 25-33
6. 原田 美枝子 (2016) : 看護学生による保育園実習での健康教育の学び 健康教育の学習方法の改善に向けて (第2報), *神奈川歯科大学短期大学部紀要*, 3, 15-22
7. 本田 里香 (2017) : 保育園実習における衛生教育を通じた看護学生の学び, *JCHO 東京新宿メディカルセンター附属看護専門学校紀要*, 3 (1), 14-17
8. 杉村 篤士, 藤塚 真希, 佐藤 朝美, 他 (2018) : 保育園実習における看護学生の学び 健康障害をもつ子どもの支援, *横浜看護学雑誌*, 11 (1), 55-61
9. 高田 理衣, 元山 彩織, 宮良 淳子 (2018) : 小児看護学実習の保育施設における学生の学び, *中京学院大学看護学部紀要*, 8 (1), 89-99
10. 矢野 芳美, 永谷 智恵, 佐々木 俊子 (2018) : 看護学生の保育所実習における学び 記述からの分析, *地域と住民*, 2, 39-45

障害児施設

11. 松下 聖子, 金城 やす子 (2014) : 経験型実習を取り入れた小児看護実習における一般病院の小児病棟と障害児施設での学びの特徴, *名桜大学紀要*, 19, 77-84
 12. 若瀬 淳子, 村田 美代子, 山元 恵子 (2014) : 障がい児施設実習における回避因子の高い看護学生の変化 内的ワーキングモデル尺度と質問紙調査からの分析, *共創福祉*, 9 (2), 55-64
 13. 藤原 理恵子, 今村 美幸, 上野 瞳, 他 (2015) : 看護大学における小児看護学実習の指導方法の検討 重症心身障害児施設見学実習での学習内容の分析, *広島都市学園大学雑誌: 健康科学と人間形成*, 1 (1), 65-74
 14. 篠澤 由香, 上杉 佑也, 樋廻 旬子 (2015) : 重症心身障害児病棟における小児看護学実習の一考察: 一般小児病棟実習との比較から, *日本看護学会論文集. 看護教育*, 45, 106-109
 15. 若瀬 淳子, 北山 由起子, 中井 里江, 他 (2015) : 障がい児施設実習で看護学生が学んだ健康な心の発達への支援 実習後レポートの学びの内容分析から, *日本看護学会論文集: 精神看護*, 45, 278-281
 16. 佐藤 寿哲, 藤本 美穂, 西 順子, 他 (2017) : 小児看護学実習における重症心身障害児施設での学生の学び — コミュニケーションと小児看護学特有の学びに着目して —, *大阪青山大学看護学ジャーナル*, 1, 27-35
-

外来

17. 白坂 真紀, 桑田 弘美 (2014) : 小児科外来実習における看護学生の学び, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 12 (1), 61-64
18. 谷口 恵美子 (2014) : 実習時間が短縮となった小児科外来実習での学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 14 (1), 175-182
19. 山本 裕子, 上山 和子 (2016) : 小児看護学実習での学生の学びの特徴 病棟中心と外来中心の実習内容から, 新見公立大学紀要, 37, 121-126
20. 小林 美和子, 川本 美代子, 田口 多美子 (2017) : 小児看護学実習における発達外来での継続看護の学び, 日本看護学会論文集: 看護教育, 47, 123-126
21. 村上 ヒトミ, 佐倉 幸子, 米山 友美 (2017) : 小児外来実習における不安の軽減を図る看護に関する学生の学び, 神奈川県総合リハビリテーション事業団厚木看護専門学校紀要, 7, 15-17
22. 齊藤 史恵 (2017) : 小児科外来実習における看護学生の予診による症状アセスメントを通じた気づきの特徴, 弘前学院大学看護紀要, 12, 27-36

子育て支援施設

23. 上山 和子, 山本 裕子 (2015) : 子育てカレッジを活用した小児看護学実習の教育評価と課題, 新見公立大学紀要, 36, 7-12
24. 上山 和子, 山本 裕子, 小田 慈 (2018) : 小児看護学における「子育てカレッジ実習」に導入した健康教育に関する教育効果, 新見公立大学紀要, 39, 59-63
25. 仲田 紀代美 (2019) : 小児看護学実習における療育センター実習の学び, 玉野総合医療専門学校紀要, 13, 1-11

NICU

26. 岡 澄子, 米山 雅子, 山下 亜美, 他 (2014) : NICU 見学実習における学生の「学び」 学生の实習記録から, 神奈川県立保健福祉大学誌, 11 (1), 61-67
27. 玉村 尚子, 小西 美樹, 井上 ひとみ, 他 (2017) : NICU 実習を通じた看護学生の学び ディベロプメンタルケアと児に出会って感じたこと・考えたこと, 獨協医科大学看護学部紀要, 10, 23-32
28. 鈴木 桂子, 高原 楓 (2019) : 低出生体重児と触れ合うことによる NICU 実習の効果, 日本看護学会論文集: 看護教育, 49, 75-78

教育機関

29. 岡田 摩理, 相撲 佐希子, 泊 祐子 (2014) : 小児看護学実習に特別支援学校実習を取り入れた学生の学びと意味, 大阪医科大学看護研究雑誌, 4, 22-31
 30. 森口 由佳子, 橘岡 正樹, 佐藤 薫, 他 (2016) : 小児看護学・小児医療と病弱教育の取り組みと連携, 大阪府立大学看護学雑誌, 12, 43-49
-

む学生の存在があった(文献5)。健康障害を持つ子どもとの関わりを目標の一つとした実習では、健康障害をもつ子どもが必ずしも在園しているとは限らないため、特別支援学校や障害児施設といった施設も実習に取り入れることや、学生が体験や学びを共有する場が必要である(文献8)と指摘されていた。また、健康教育指導を行うことを目的とした実習では、「保育園での健康教育に関する情報の不足」があり、事前に「健康教育に関する学習の機会を設ける」必要性も指摘されていた(文献4)。

2. 障害児施設

文献は6件であり、そのうち3件が重症心身障害児施設、3件が障害児施設であった。実習日数は1日が1件、5日間(1週間)が3件、2週間が1件、記載なしが1件であった。実習内容は見学実習が1件、子どもを受け持つ実習が5件で、そのうち4件は看護過程を展開していた。

1日の見学実習後の学生のレポートを分析した研究(文献13)では、障害児の個別性や人権などの「重症児(者)の特徴の理解」、障害児者の安全安楽を考慮した設備、多職種連携などの「障害児(者)が生活する環境の理解」、非言語的コミュニケーション等の「障害児者とのかわり方」、「障害児者に必要な看護技術」、「家族への看護支援」を学んだと報告されていた。これらの学びには偏りがあり、看護援助や環境については記述が多かったが、「重症児者とのかわり方」は学生自身が体験していないこともあり記述が少なかったと報告されていた。

他の5件の論文はいずれも障害児施設で子どもを受け持っていた。そのうちの3件(文献11,14,16)は小児病棟と障害児施設とで学生の学びの特徴を比較したものであった。それぞれ、「病院実習と障害児施設実習で学生の学びは共通するものが多かった」(文献11)、「成長発達

のための援助ができる」の評価が重症児病棟で有意に高いが他項目に有意差はなかった(文献14)、「小児病棟と共通の実習目標は達成できた」(文献16)とされており、障害児施設でも小児病棟での実習と同様の学びができると報告されていた。他の2件のうち1件(文献15)は、学生が障害児施設で学んだ子どもの心の発達への支援内容であり、子どもの社会性を育み、子どもが持つ力を引き出す「児の主体性を育む支援」や、子どもの変化や反応をキャッチする支援者の五感を育てるといった「支援者自身の心の発達」、表情やしぐさなどでコミュニケーションをとったり、子どもに関心を示したりすることで「児の情緒面を育む支援」等を学んでいた。これらの学びの多くは、看護師と子どもが余暇時間に触れ合う場面を共有することで得られていた。残り1件(文献12)は、「他者からのサポートを求めない傾向があるとされる『回避因子』の高い学生」が、障害児施設で実習をすることで、「他者からのサポートを受け入れる姿勢の変化がみられた」と報告しており、障害児施設では学生のできる面を誉めて伸ばす指導や学生の考えの表出を待つ指導ができることが影響していると考えられていた。

一方、課題としては家族との関わりが難しい(文献13,14,16)、小児病棟特有の「展開の速さ」は経験できない(文献11)、重症心身障害児とのコミュニケーションには一定の時間が必要(文献16)という報告があった。加えて、学生の心理面への影響として、実習前の不安は小児病棟よりも有意に高いが、実習初日を終わると不安の差は消失することが報告されていた(文献14)。

3. 外来

文献は6件であり、実習期間は2時間、2.5時間、1日、15時間、病棟に患児が入院していなかった場合に小児看護学実習を外来中心で実

施する実習など様々であった。実習内容は、予診の実施、看護師と共に行動し一部介助を実施、患児を受け持ち実習展開、見学等であった。

予診時の症状アセスメントから得た学びの内容は、「症状を中心とした関連づけ」、「明確になった不足知識」、「不安と混乱の受け止め」、「状況に応じた柔軟な対応」、「話しやすい雰囲気」、「整理された分かりやすい記録」、「適切な判断と援助」(文献22)であった。また、身体的認知的発達や声掛けの工夫、説明の仕方など「成長発達の理解と特徴を配慮した関わり」、子どもと家族が対象者であることや家族の負担や不安への気づきなどによる「家族への関わり」の重要性に関する学びは、5文献(文献17,18,19,20,22)で報告されていた。子どもの動きに対応した「安全・安楽の保障」や身体計測での正確で迅速な技術や状態変化への迅速な対応といった小児看護の特殊な「看護技術」に関する学びは、3文献(文献17,18,19)で報告されていた。また、患児を受け持つ実習展開では、健康児も対象であることを再認識し「子どもの健康維持・増進」についての学びが病棟実習とは異なっていた(文献19)。加えて、外来受診がスムーズに進むような調整や感染防止など多忙で多様な外来業務の中での「現場調整力」(文献17,18)、在宅療養に必要な制度を知るなどの「在宅療養への支援」(文献18)についても学んでいた。

子どもの体調が良い時の定期受診である発達外来での実習では、急性疾患が多い病棟とは異なる落ち着いた環境下であることから、親や子どもの置かれている状況や心情、教育機関などを含めた地域の支援について学生が理解できたと報告されていた(文献20)。

一方、課題は、遊びの提供や説明・同意の保障の理解をする機会の不足(文献19)、受診時の子どもや家族の気持ちに対する理解ができて

いないことが指摘されていた(文献18)。

4. 子育て支援施設

文献は3件で、実習施設は大学内に設置された子育てカレッジと療育センターであり、実習期間はそれぞれ2日間、1日であった。実習内容は、学生が子育てカレッジに来所した子どもや保護者に自由に関わるノンプログラム型の実習と子どもへの健康教育を実施する実習、多職種の療育場面見学・体験であった。

子育てカレッジでは、子どもにおける遊びの意義、成長発達を促す遊び、安全を意識した遊びなどの「遊びの捉え方」、保護者の子どもに対する思い、多様な子育て支援などの「保護者の捉え方」を学んでいた(文献23)。また、健康教育を実施する実習で、「把握した保護者のニーズを踏まえた健康教育のテーマ」、内容の構成を検討することで、「子ども・保護者の反応」を具体的に学び、さらに、健康教育の意義を振り返ることが出来ていた(文献24)。療育センター実習では、療育に参加することで、子どもを知ろうとする姿勢を持ち「発達特性を捉えることの大切さ」、セラピストの家族への関わりを見ることで、子どもだけでなく「家族支援の重要性」を学んでいた(文献25)。

一方、課題としては、子育てカレッジでは日常生活援助を保護者が行うため、「基本的な生活習慣の獲得への関わり」が難しいことが挙げられていた(文献23)。

5. NICU

文献は3件であり、実習期間は1件が半日と2件が1日で、いずれも病棟実習期間中であった。実習内容は、DVDの視聴と実習指導者の指導の下での見学実習、指導者の指導の下でバイタルサイン測定など一部実施であった。

見学実習の文献に共通していた学びの内容は、週数に応じた「成長発達の促進」、児の一挙手一投足に注目し「サインを読み取る観察力」、

母子関係や両親に対する「家族関係への援助」、「児の生命」、「他職種連携」(文献26,27)であった。また、児への安心感やタッチングなどに注目した「ストレスの少ないケア」、「児の存在への肯定感」(文献27)、母胎内に近い「ケア環境」、「生命の誕生と危機」(文献26)などの学びがあった。また、見学のみではなく一部実施した場合は、直接触れたことにより「児に触れることの難しさ」「低体温や皮膚の脆弱性へのケア」「児の安全安楽のためのポジショニング」など、より具体的な低出生体重児への援助を学んでいた(文献28)。

一方、課題としては、ディベロップメンタルケア理論の理解の不十分さ、イメージの持ちにくさなどがあり、目前で展開されるケア行為に焦点があたっている(文献27)などの傾向が報告されていた。

6. 教育機関

文献は2件であり、実習期間は記載のあったもので3日間であった。実習内容は、病棟実習中に分教室(院内学級)見学および分教室教員による講義の受講と、特別支援学校の心身に重複障害のある子どものクラスで、児童生徒の学校生活を3日間見学しながら教職員と共に子どもに関わる実習であった。分教室見学および講義受講では、分教室在籍の患児を受け持った学生だけでなく、他の学生も子どもの発達段階をふまえた教育的関わりについて学んでいた(文献30)。特別支援学校実習では、「体験から得た障がい児との関わり方」「クラス担当教諭の支援方法」「看護と教育の共通点」「看護師の役割」「障がい児の医療的ケアを行う上での留意点」「医療施設と教育施設でのケアの違い」を学んでいた。また、今後は家族を支える役割について考える等、在宅看護における家族支援の在り方についての課題も明らかになっていた(文献29)。

V. 考察

今回の文献検討での特徴は、1. 小児病棟以外の障害児施設で子どもを受け持ち、看護過程の展開を行う実習が複数報告されていたことや、病棟で受け持ちがない場合に小児外来を受診した患児を受け持つ実習展開が報告されていたこと、2. 保育施設だけでなく子育て支援施設や教育機関など、生活や療育・教育を中心とする場で看護実践を学ぶ実習が報告されていたことであった。そのため、ここでは「小児病棟以外で子どもを受け持つ実習」と、「生活や療育・教育を中心とする場で小児看護を学ぶ実習」について考察する。

1. 小児病棟以外で子どもを受け持つ実習

これまでの障害児施設での実習は見学実習が中心で、障害を持ちながら成長発達する子どもを理解する、障害を持った子どもの生活について知るといった認知レベルの実習目標で行われることが多かった(山内他, 2017)。しかし、今回の文献検討では、障害児施設でも学生が子どもを受け持ち、実際に関わりを持つことで看護過程の展開など病棟実習と同様の目標達成が可能であることが明らかになった。はじめにでも述べたように、看護系大学の急増(文部科学省, 2019)、小児科病棟の減少(厚生労働省, 2017)により、2単位の小児看護学実習を小児病棟のみで行うことが難しくなった現状がある。さらに、0～14歳の子どもの入院期間は短縮化し(厚生労働省, 1998; 2019a)、学生が子どもを受け持つ期間も短くなっていることが推察される。また、治療経過が早く子どもの体調の変化も大きいため、学生が子どもと家族の状況をアセスメントし、看護上の問題や課題を抽出し、援助を実施し、評価する一連の看護過程を展開することは困難な状況がある(山本他, 2018)ことも報告されている。一方、障害児施設は生活の場でもあり、入所している子どもは

年単位でその施設で過ごすことが多く、複数の疾患や障害を抱え（厚生労働省，2019b）、学生が理解をするのは困難ではあるものの、変化は緩やかで実習期間中に病状や障害の程度が変わることは少ないと考えられる。そのため、じっくりと子どもに向き合い、一連の看護過程を経験することが可能であったと考えられる。

一方、課題として、障害児と関わる機会が殆どない学生が障害児施設で実習することから、不安が強くなることが挙げられていた（文献14）。障害児に対するイメージ化ができ不安の軽減が図れるように、実習前の準備が重要である。

外来を受診した子どもを受け持つ実習展開では、病棟実習と同様の学び以外に、子どもの健康の維持・増進の学びが報告されており（文献19）、病棟実習のみでは気づけない学びを得ることもできていた。小児看護の対象は、あらゆる健康レベルにある子どもとその家族であり、健康に育てる・育つという保健の視点を学ぶことも重要である。限られた実習時間の中で、病棟で受け持ち患児がない場合に学生の実習での学びを保証する上でも、外来で受け持ちをする実習展開について検討する意義があると考えられる。

2. 生活や療育・教育を中心とする場で小児看護を学ぶ実習

従来の保育園実習は、健康な子どもを理解するために小児看護学実習に組み込まれていた（山内他，2017）。しかし、今回の文献検討では、保育園実習における学生の学びとして、健康な子どもの成長発達や生活を知るだけでなく、健康障害を持つ子どもや医療的ケアを受ける子どもへの支援について学んでいることが明らかになった。さらに、保育園や子育て支援施設で学生が子どもを対象とした健康教育指導を実践するという実習も報告されていた。子どもへの健

康教育を実施することで、健康教育について学習するだけでなく、子どもの認知発達の理解、どのような働きかけをすれば子どもが集中して聞いてくれるのかについても理解することができていた。加えて、子どもの生活において、どのような健康教育が必要かをアセスメントすることも学びの1つとなっていた。

医療と生活や療育・教育をつなぐ場である外来の実習では、学生自身が予診時の症状アセスメントを行うことで、短時間の実習にも関わらず看護師の役割を実感することができていた（文献22）。また、在宅療養に必要な制度を知ることなど在宅療養への支援の必要性（文献18）についての学びを得ていた。これは、NICU実習における低出生体重児の退院移行支援や、特別支援学校での看護師の役割や医療的ケアを行う場合の留意点にもつながる学びであり、病気・障害や医療的ケアを持ちながら地域で生活する子どもとその家族の今後の見通しを考える機会になる実習として位置づけることが可能であると考える。

小児看護の対象は子どもとその家族であるが、小児病棟や障害児施設などの実習では実習時間内に家族の面会がない場合に、家族への支援を直接学ぶことができないこともある。一方、外来や子育て支援施設、NICUでは、実習時間内に学生が家族と接する機会も多く、家族への支援を体験しやすい実習となっていたと考える。家族とともに子どもが生活し育つことを実感し援助につなげられる実習は、短期間であっても小児看護を学ぶ上で大切であり、学生の学びは、まさに小児看護学実習の目指すところでもある。また、子どもの権利を保障するために、子どもと家族の先を見通した看護を展開することや、病気や障害に関わらず、子どもの学ぶ権利について考える機会を提供することは、今後の小児看護の役割を考える上で、貴重な体験であると

考える。

このように、今回の文献検討では小児病棟以外の場における看護実践を学生が直接学んでいることが明らかになった。これは、小児病棟以外で多くの実習が行われるようになったからというだけでなく、小児領域でも地域包括ケアが広がり、それに伴って地域における小児看護の役割が増大したことを示しているのではないかと考える。これまでの保育園実習や子育て支援施設、外来での実習は、病棟での看護過程の展開時に役立つように、子どもの成長発達や生活を知ることが目標となっていた。しかし、今後の小児看護学実習では、地域の中でどのような看護が必要とされているのかを考える能力や、地域の中で看護を提供できる能力を育てることが求められると考える。

3. 本研究の限界と課題

本研究で分析対象とした論文の多くは学生が実習記録として提出したレポート等を分析したものであった。そのため、学生が学ぶことができなかつたこと、学生が困難だと感じたことについての記述は少なかった。また、実習内容や実習の場に関する説明は論文ごとに異なり、どのような実習がより効果的であったのかについては明らかにできていない。今後のより良い実習計画のためには、学生に無記名でのアンケートを実施する、インタビュー調査を行うなどの手法を用いて、より詳細なデータを蓄積し、分析する必要がある。

VI. まとめ

2014年から2019年8月までの約5年間の国内論文30件を分析した結果、実習施設が不足する中で、小児病棟にこだわらず障害児施設や外来で子どもを受け持つ実習も実施可能であることが明らかになった。また、保育施設や子育て支援施設、外来、教育機関など、地域での看護実

践を学生が学ぶ実習も行われていることが明らかになった。地域包括ケアが広がっている現在、地域の中で、どのような看護が必要とされているかを考える能力や看護を提供できる能力を育てる実習計画が必要である。

VII. 利益相反

研究における利益相反は存在しない。

VIII. 引用文献

- 厚生労働省 (1998) : 平成8年患者調査の概況, <https://www.mhlw.go.jp/www1/toukei/kanja/4-1.html>. (2019.10.16閲覧)
- 厚生労働省 (2016) : 子どもの医療制度の在り方等に関する検討会 議論の取りまとめ, <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12401000-Hokenkyoku-Soumuka/0000117936.pdf>. (2019.8.19閲覧)
- 厚生労働省 (2017) : 医療施設 (静態・動態) 調査・病院報告の概要, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/17/dl/09gaikyo29.pdf> (2019.10.15閲覧)
- 厚生労働省 (2019a) : 平成29年 (2017) 患者調査の概況, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/dl/03.pdf>. (2019.10.16閲覧)
- 厚生労働省 (2019b) : 第2回障害児入所施設のあり方に関する検討会, <https://www.mhlw.go.jp/content/12201000/000493170.pdf>. (2019.10.16閲覧)
- 文部科学省 (2018) : 文部科学大臣指定 (認定) 医療関係技術者養成学校一覧 看護師・准看護師養成施設・入学定員年次推移一覧, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kango/1353401.htm (2019.11.12閲覧)
- 太田 智子, 筒井 真優美, 川名 るり, 他 (2014) : 看護系大学における小児看護学実習の研究

動向：—1996年カリキュラム改正前後の比較—。日本小児看護学会誌, 23 (3), 84-91.

清水 史恵 (2012)：小児病棟以外の場における小児看護学実習での学生の学びに関する国内文献の検討。日本小児看護学会誌, 21 (3), 71-77.

山本 裕子, 上山 和子 (2018)：小児看護学実習の困難とその対策に関する文献検討。新見公立大学紀要, 39, 163-169.

山内 朋子, 川名 るり, 筒井 真優美, 他 (2017)：看護系大学小児看護学実習フィールドの現状と今後の研究課題に関する文献検討。日本小児看護学会誌, 26, 84-90.

全日本病院協会医療行政情報 (2015)：母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について, https://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/pdf/2015/150908_8.pdf (2019.8.19閲覧)